

Q 昼寝の際に突然 肋骨付近に激痛が走った

二十八歳、女性。二週間ほど前、昼寝をしていたら、突然、肋骨付近に激痛を感じ、目が覚めました。息を吸ったり吐いたりするのにも痛みを感じ、痛い部分に手をあてようと腕を動かそうとするとさらに痛みが増し、動くことがまったくできなくなりました。痛みが続いたのは二〇分くらいです。動かすに深い息をせずにじっとしていたら、痛みがだんだん引き、まったく正常にもどりました。その日の夜も、同じ症状がおこったのですが、何が原因なのかわかりません。なかなか病院に行く暇がないのですが、このような症状は一般的にありうるのでしょうか。

(京都府 U・N)

A 胸部痛は仙腸関節や胸肋関節 などへのAKKAで消失

人 体に発生する痛みは、内臓の障害によるものや、神経や血管性によるものなど、いろいろな原因があります。現代の進歩した医学では、その原因は容易に解明されていると思われがちですが、まだ不明な点が多いのが実情です。

さまざまな検査をしても異常がない場合は、よくわからない痛みの総称として、神経痛という名称が使われていま

す。肋間神経痛、坐骨神経痛などです。また、すでに解明されたと思われる痛みについても、実際の患者さんを診ているとその理論に矛盾が多く見られます。たとえば腰痛の場合、MRI（磁気共鳴画像）でヘルニアがでていると、それが原因といわれがちですが、ヘルニアがあってもまったく痛みのない人も多く、このことは腰

痛ばかりでなく、胸部痛、ひざ痛、肩こりなど、整形外科的な痛みの大部分に当てはまります。

このように原因が不明、あるいは矛盾を抱いたまま対応している整形外科的な痛みに対し、近年AKKAという診断と治療を兼ねた方法が発見されました。

AKKAとは正確には「関節運動学的アプローチ」といいます。これは「関節運動学に基づく治療法で、関節の遊びおよび関節面の滑り、回転回旋などの関節包内運動を改善する手段である」と定義される最新の手法による治療技術です。

この技術は当初、かたくなった関節を治す目的で、リハビリの治療法として開発されたのですが、その過程で痛みに対して著しい効果を示すことがわかり、現在では痛みの診断・治療法として知られています。

関節の内部の動きが正常に動かなくなった状態を関節機能異常といいますが、これからの中心部にある関節、たとえば仙腸関節や胸肋関節などにおこると、その関節の周囲ばかりでなく遠く離れた予想もしない部位にまで痛

みを生じます。これを関連痛といいますが、この痛みは該当する関節を正常に動くようにするととれてしまいます。

以前、他医でエックス線やMRI検査で、椎間板ヘルニア、脊柱管狭窄症、変形性膝、股関節症といった疾患によるといわれた痛みも、AKKAでとれることが多く、私の経験では、胸痛や腰痛、ひざ痛、肩こりなど外傷を除いた整形外科的な痛みの約80%は病名に関係なく改善されます。

したがって、これらの痛みの多くは画像の変化部位ではなく、その個所とは遠く離れた関節の機能異常が真の原因であることが判明しました。

いろいろな関節にAKKAを行った結果、腰の中心にある仙腸関節は動きの非常に少ない関節で、機能異常をおこしやすく、その関連痛はほぼ全身におよぶことがわかりました。

相談者の胸の痛みは諸検査をしても異常のない場合、よくわからないものとして「肋間神経痛」という病名をつけられます。または、エックス線写真など画像上の変化をその原因といわれがちです。

しかし、私の経験では心臓疾患などの内科的な原因のな



い胸部痛のほとんどは、仙腸関節を中心とした脊柱にある関節へのAKKAで消失し、たとえ痛みが残った場合でも、前胸部にある胸肋関節へのAKKAで消失しますので、関節原性の関連痛と思われる。確定診断するために、AKKAを一度受けられることをおすすめします。

回答者

望クリニック

整形外科

院長

住田憲是



〒171-0022 豊島区南池袋3-9-7 HI池袋ビル1F
☎03-3986-7889